法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-17

［最優秀賞受賞研究／映像部門］　君がくれた七日間

鈴木，晶

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
16
(開始ページ / Start Page)
141
(終了ページ / End Page)
146
(発行年 / Year)
2015-04

Hosei University Repository

映像部門

君がくれた七日間

国際文化学部　鈴木晶・志村ゼミ

監督：王城星海
脚本：鈴木晶・志村ゼミ４年
編集：王城星海
撮影：王城星海
出演：４年　石川真衣、森田直紀、大場将也、小澤有輝、
　　吉野拓磨、菱木麻佐美、村瀬友希、鈴木花奈
　３年　松本栞
　志村三代子講師

《前置》

人の命はとても儚く、いつか消えて無くなるものです。しかし、世の中には自ら命を絶って、死に行く者がいます。嫌な事が重なり、自分の生きる意味や存在価値に疑問を抱いたとき、人は死という道を選択しこの世から消え去ろうとします。ご存知の通り日本の自殺率は世界でも非常に高く、年間で約３万人。そして、私たちと同じ20代の自殺者はそのうちの約3000人もいます。死に関する日本社会のとても悲しい現状です。

では、あなたは死後の世界を想像した事がありますか？目の前が真っ暗になり、二度と目を開けることができなくなる事を。そして、家族や友人と二度と会えなくなる状況を。あなたはイメージする事ができますか？　「死」という道を選んだ人にとって、その道は果たして本当に幸せなものなのか。

Hosei University Repository

《内容》

私たちはこの作品を通じて「死」や「自殺」と言う物を捉え直し、誰も知る事のない死後の世界を描いてみました。もし自殺を図った者が死後に感じた後悔の念や罪悪感を、次に自殺しようとしている人に伝える事が出来るのであれば、自殺志願者は確実に減るのではないでしょうか。映像だからこそできる表現を活かして、一度自殺を経験した者と、これから自殺をしようとしている両者の関わり合いを表しました。もしも一人でも多くの自殺志願者を救うことが出来たら。そしてもしも一人でも多くの自殺志願者に辛いことや悲しい事を乗り越えた先にはきっと明るい未来があるという事を伝えられたら。そんな思いを込めて私たち本作品の制作に取り組みました。

本作品は自殺しようとしていた女の子の身に起こるちょっと不思議な物語です。

《主人公》

ゆき：平凡な女子大生。就活が上手く行かず、彼氏にも振られ、生きる意味を失って屋上から自殺を図ろうとする

瞬介：自殺しようしていたゆきを救った近所に住む男。普段からゆきの事を見かけていた。

《本作品の主な映像技法の解説》

屋上のシーン

ここではゆきが屋上から飛び降り自殺を図ろうとします。それを見かけた瞬介が止めようと屋上に向かって急いで階段を登ります。

屋上の端から今にも落ちそうな彼女とそれを止めようと必死に階段を駆け上がる瞬介。二つの視点を交互に映し出すカットバックを行う

Hosei University Repository

事で、緊迫感を表現しました。

屋上のシーン

自殺しようとしているゆきを真横から撮ったシーンです。

とても危険で今にも屋上から落ちてしまいそうな程ギリギリの場所に立っているかのように見えます。しかし、実はさらにその下に足場があり、カメラを低い場所に置いて撮ることによってその足場が見えなくなります。このように撮影する事でゆきが屋上のギリギリの場所に立っているかのように見えます。

瞬介が徐々に浮き上がるシーン

幽霊になった彼が路上で目を覚ますシーンです。何もなかった路上から彼が徐々に浮き上がって来るのがわかります。これは同じアングルから映した何もない路上の動画とその路上で瞬介が寝そべっている動画を重ね合わせたものです。瞬介が寝そべっている方の動画を、編集ソフトを使って、ゆっくりと透明度を上げて行く事で瞬介が徐々に浮き上がる表現が可能になりました。

通行人が幽霊になった瞬介を通り抜けるシーン

通行人が画面左から右へ歩いて行く動画の上に、編集ソフトを使って横向の瞬介だけを切り抜いた動画を重ねる。これだと瞬介の奥側を通行人が通り過ぎたようにしか見えないので、通行人と横向の瞬介が重なりあった瞬間に横向の瞬介の動画削る。重なった部分だけを削る。そして横向の瞬介を通行人が通過しきった部分は徐々に戻して行く。これによってあたかも通行人が瞬介を通り抜けるシーンを実現した。

Hosei University Repository

瞬介が道端を歩くシーン

このシーンは瞬介が一人で考え事をしながら家の周りを歩くものです。歩いているシーンを手ブレなく、綺麗に撮影する際はドリーと呼ばれるものを通常使います。しかし、そのような機材を使う撮影環境がないため、スタビライザーという手ブレ防止器具を使いました。背景は動いていますが手ブレがない滑らかな映像の仕上がりになっています。

瞬介が自殺するシーン

このシーンでは暗い部屋を表現しました。通常、暗いところで撮影するとノイズが多く映り込んでしまいます。しかし、この映像ではあまりノイズがありません。これはカメラの方で感度を下げて（暗くして)、実際には電気を付けた明るい部屋で撮影をしました。暗いシーンでもより鮮明でノイズの少ないシーンをカメラの設定により実現することができました。

ゆきが走るシーン

彼の元に急いで向かう女の子。駅構内を走るシーンがここであります。走っている姿を正面から撮ったものですが手ブレがなく、滑らかな映像になっています。これも瞬介が道端を歩くシーンと同様にスタビライザーを使ったものです。

最後に瞬介が消えるシーン

最後のシーンで瞬介は抱いていた女の子をそっと離して消えていきます。これは固定カメラで瞬介がいない動画の上に、同じ場所で撮った瞬介を編集ソフトで重ね合わせ、消える際に透明度を下げて消しました。

Hosei University Repository

手だけによる感情表現

最後のシーンで消えそうになる瞬介をゆきが引き止めようとする。ゆきが瞬介に近づいた後に瞬介の手首を掴むシーンがあります。手だけを移すだけでも行って欲しくないという気持ちが伝わります。そしてその後の場面でも手だけが映るシーンがあります。そこではゆきが握っている瞬介の腕をさらに強く握ります。これも本当に瞬介に消えて欲しくないゆきの感情を表しています。手だけでも人の感情を見ている人に伝えることができるということです。

《本作品の音に関する解説》

映像作品に置いてもっとも難しく、もっとも注意しなければならないのが音です。人の声、BGM、効果音、環境音、これら全てを綺麗に編集しなければ見ている人に違和感や不快な印象を与えかねないです。

アフレコについて

本作品の役者の声はほとんどがアフレコによるものです。つまり後から録音した声を映像に合わせたということです。実際の撮影で収録した声は風の音やその時の環境音などが邪魔になり綺麗に聞こえませんでした。アフレコをする事でより聞き取りやすいクリアな声が動画と一緒に流れてきます。

BGM について

本作品の BGM は録画した映像を見ながら決めました。イメージしている映像と実際に撮った映像は全く違うので、後から BGM を決める方がより雰囲気にあったものが見つかる。

Hosei University Repository

環境音について

役者の声を全てアフレコにした代わりに映像にある元の音声を全て削除しました。しかし、これだけでは声しか聞こえなくて不自然なので故意にノイズを映像に入れました。公園のノイズでは子供がはしゃいでいるノイズをあえて使用し、街中のノイズでは車の通る音などが入ったノイズをあえて使用してリアリティーを追求しました。